歴史化する抵抗における所有権とエスニシティ

――現代フランスで「移民の記憶／歴史を取り戻す」――

一橋大学　田邊佳美

1. 目的

この報告の目的は、現代のフランスで反人種差別の抵抗における言説の歴史化が、これを実践する個人と集団、さらにはそれを取り巻く社会関係において持つ意味を明らかにすることである。フランスでは、長らく、移民に関わる過去の出来事が公的な記録や表象から抹殺されてきたが、1980年代以降、一部の活動家やアーティストの問題提起と、歴史学者らによる「移民の記憶」の「承認」要求をうけて、今日では移民統合政策の一環として国家が主体的に「移民の記憶」の再構築に取り組む状況にある。他方で、「移民の記憶」を論じる主流の研究（特に歴史研究）は、記憶と歴史をめぐる規範的な言説から、国家による移民の差別と抑圧の構造を社会科学の名の下に再生産してきた（Boubeker 2008）。本報告では、こうした批判をふまえながら、反人種差別運動に関わるアクターが実践する過去の再構築、すなわち「記憶の営み」に着目し、「移民の記憶／歴史」と反人種差別が交差・関連する様相を考察する。また、この営みにエスニシティがどのような形で介在し、経験されるのかを明らかにする。

2. 方法

考察にあたっては、「記憶の営み」をめぐる個人のナラティブ分析を、運動レベルの実践に関わる言説・表象分析と組み合わせる。データの収集は、記憶と反人種差別を活動テーマとする、リヨン市・パリ市・トゥールーズ市近郊の3団体を調査のフィールドに、各団体の公式・非公式な活動への参与観察と計15名のメンバーへの聞き取り調査にもとづく形で行った。とりわけ、戦後の旧植民地からの移民やその子孫が担った過去の反人種主義・差別運動に関わる「記憶の営み」が、アクターの主観レベルと集合レベルでどのように経験・実践されるのかに着目して分析を行う。

3. 結果

分析の結果、移民の記憶／歴史が、アクターの主観レベルにおいては個人的経験の社会化／一般化を促し、集合的レベルにおいては反人種差別の対抗言説に「正当性」をもたらす資源として位置づけられることが明らかになった。そのさい「記憶／歴史を取り戻す」プロセスにおいて、エスニックな連帯と境界が形成・交渉される様相がみられた。また、「移民の記憶」をナショナルな言説・表象の枠組みに包摂し、非政治化を試みる国家に対し、反人種差別のアクターらが記憶の「所有者」・「継承者」としての正当性を根拠に対抗言説を組み立て、今日的な差別と不平等の是正を交渉する様相も見られた。

4. 結論

以上から、反人種差別運動とそれに関与する個人による歴史化の実践は、移民やマイノリティを抑圧する社会関係における、新たな個人的・集合的抵抗の手段として捉える事ができるのではないだろうか。さらには、「移民の記憶／歴史」は、承認が問われる過去の出来事という視点を越えて分析することで、移民・エスニシティ研究および反人種差別運動の研究に新たな知見と視点もたらすのではないだろうか。

文献

Boubeker, Ahmed. 2008. “L’immigration : enjeux d’histoire et de mémoire à l’aube du XXIe siècle,” in *Les guerres des mémoires : La France et son histoire*, edited by Pascal Blanchard et Isabelle Veyrat-Masson. Paris: La Découverte: 165-174.